

A年特定19 マタイ18章21—35節

〔直訳〕

21 そのとき 近づいて ペトロは 言った 彼に、

「主よ、 何回 罪を犯すだろうか 私に対して 私の兄弟が

そして **私は赦すだろうか** 彼に 七回までですか」

22 言う 彼に イエスは、

「ない 私は言う あなたに 七回まで そうではなく 七十七回まで。

23 それゆえに 比べられた 天の国は ある(人に) 王に、

その者は 望んだ 勘定を清算することを 彼の**奴隷たち**との。

24 だが始めて 彼が 清算することを

連れて来られた 彼へと 一人の 一万 タラントンの負債者が。

25 だが持たないで 彼は 返済することを

命じた 彼が 主人は 売られることを

また 妻が また 子どもたちが また 彼が持つところのすべてが

そして 返済されることを。

26 そこで伏して **奴隷**は ひざまずいた 彼に 言いつつ、

『**こらえてください** 私に対して、 そして すべてを 私は返済するだろう **あなたに**』。

27 だが深く**憐れんで** その**奴隷**の主人は 放免した 彼を

そして 貸金を **彼は赦した** 彼に。

28 だが出て行って その**奴隷**は 出くわした 彼の**奴隷仲間**たちの一人に、

その者は 借金していた 彼に 百 デナリオンを、

そして 捕まえて 彼を 彼は絞めあげていた 言いつつ、

『返済しなさい ところのものを **あなたが借金する**』。

29 そこで伏して 彼の**奴隷仲間**は 訴えていた 彼に 言いつつ、

『**こらえてください** 私に対して、 そして 私は返済するだろう **あなたに**』。

30 だが彼は 望まなかった そうではなく 出かけて 彼は投げた 彼を 牢の中へ、

まで 彼が返済する 借金したものを。

31 そこで見て 彼の**奴隷仲間**たちが 起こったことを 悲しんだ 非常に

そして 来て 詳細に話した 彼ら自身の主人に すべてを 起こったことを。

32 そのとき 呼び寄せて 彼を 彼の主人は 言う 彼に、

『**悪い奴隷よ**、 すべての **あの借金を** **私は赦した** **あなたに**、

ので **あなたが訴えた** 私に。

33 すべきでなかったか **あなたも 憐れむ**ことを **あなたの奴隷仲間**を、

とおりに 私も **あなたを 憐れんだ**』

34 そして 怒って 彼の主人は 渡した 彼を 拷問役たちに

まで 彼が返済する すべての 借金したものを。

35 このように 私の天の父も 行うだろう **あなたがたに**、

もし **あなたがたが赦さないなら** 各々 その兄弟を **あなたがたの心から**」。

〔新共同訳〕

21 そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」 22 イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。 23 そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。 24 決済し始めたところ、一万タラント借金している家来が、王の前に連れて来られた。 25 しかし、返済できなかったのも、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。 26 家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。 27 その家来の主君は憐れに思っ、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。 28 ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会おうと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。 29 仲間はひれ伏して、『どうか待ってください。返すから』としきりに頼んだ。 30 しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。 31 仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。 32 そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。 33 わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』 34 そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。 35 あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

①構成

① 第一段落 (21―22節)

② 21―35節の間に4回繰り返される「赦す」が主題となる(21・27・32・35節)。赦しを「七回」までとして限界を考えるペトロと、「七十七回(七の七十倍)まで」として「無限の赦し」を見るイエスが対比されている。

② 第二段落 (23―27節)

③ 貸借の清算をする王の前に引き出された奴隷は「負債者」と呼ばれている(24節)。直訳の24節二行目で「一人の」と訳したのは不定代名詞の代用であるから、「一万タラントを借りているある人」という意味になる。新共同訳は「一万タラント借金している家来」と訳すが、原文には「家来(奴隷)」にあたる語は用いられていない。25―26節では「返済する」という語が3回繰り返され、負債者は返済する義務があることが強調される。負債を返済することができない者は、もはや王の「奴隷」ではなく、「負債者」ではない。

④ 負債者は返済を約束するが、主人はこの巨額の負債をどうして返済することなどできないことを承知の上で、赦す。それは、返済不能の負債を抱える奴隷を主人が「深く憐れんだ」からである。負債者が主人との関わりを持ち続けるためには、主人が「深く憐れんで、赦す」以外に道はない。

③ 第三段落 (28―30節)

⑤ 28節以降に「奴隷仲間」という語が4回現れる。第二段落では「王と奴隷」の関係が述べら

れていたが、28節以降では、この語に示されるように、主人に赦された奴隷とその仲間、奴隷同士の関係が問題とされる。

① 奴隷仲間の訴えは、主人に懇願した奴隷の言葉と「すべてを」を除いて、同じである。この言葉聞いて、主人は「深く憐れんで、赦した」(27節)のに対して、負債を赦された奴隷は「望まなかった、そうではなく(奴隷仲間を)牢の中へ投げた」(30節)とされ、両者が対比されている。

#### ④ 第四段落 (31―35節)

⑦ 33節では「憐れむ」が2回繰り返され、「赦し」は「憐れみ」から来ることをこの奴隷が理解しなかったことが明らかにされる。34節は30節と対応する。それぞれの二行目は「すべての」を除いて、同じ表現である。悪い奴隷が「牢の中へ投げた」ので、主人も「怒って拷問役たちに渡した」。

① 主人の深い憐れみによって、主人との交わりに入れられていることを大切にしないなら、怒りに触れることになる。奴隷仲間であることを忘れた者には、無限の刑罰が与えられる。「返済するまで」は、負債が多額なことから考えれば、刑罰が無限であることを意味するだろう。

#### ② 無限に赦す (21―22節)

② ユダヤ教のラビは兄弟を赦す回数を3回までとする。これと比べると、ペトロの言う「7回」は寛容さを示すものであるが、赦す回数を問うかぎり、赦しを数量的に捉え、赦す限界を問題にしていることになる。しかし、イエスは無制限に赦すようにと勧める。ここにイエスの教えの神髄がある。「無制限の赦し」は、さらに23節以下のたとえで説明される(ルカ一七4、一六一―8も参照)。

⑥ 22節三行目の赦しの回数は「七十倍まで」とも訳されるが、直訳では「七十七回まで」としている。「七十七回まで」と訳すことができるのは、この箇所との関連性が指摘される創世記4章24節のヘブライ語聖書が「七十七」とする数字を、七十人訳聖書が「七十」と同じギリシア語で訳すからである。いずれにせよ、問題とされているのは厳密な回数ではなく、回数を問う「赦さない心」である。

③ 創世記4章24節との関連性は数字だけではない。創世記4章24節のレメクの言葉は、人類にとっての最初の兄弟カインとアベルの物語を踏まえた、際限のない復讐を誓う「赦さない心」を表明しているからである(創四15、十二族長の遺訓十二男ベニヤミン七4)。これに対して、イエスは無制限の赦しを説く。「赦す心」はイエスの教えの重要な特質の一つである(五21以下・38以下・43以下、七1以下などを参照)。

#### ③ 深く憐れんで、赦す (23―27節)

③ タラントンは金額を表す最大の貨幣単位であった。F・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』によると、紀元前4年にローマ属州であったユダヤ、イドマヤ、サマリアから徴収された税の総額が六百タラントン、ガリラヤとペレアからは二百タラントンであったと記されていることから見ても、一万タラントンがいかに膨大な額であるかが理解できる。一タラントンは六千ドラクメ、つまり六千デナリオンにあたる。一デナリオンは当時の労働者の日給であるから、一万タラントンは六千

万日分の賃金になる。

⑥ 「奴隷」と訳した語はドゥーロスである。この語は主人や自由人に対して「奴隷」を意味し、王に対して「家来・臣下」、神に対して「奴隷・僕」の意味でも用いられる。ここに登場する「家来(奴隷)」は、普通の家来ではなく、王から領地の一部を任された地方総督であり、その行政区における税徴収の責任を持った人物として想定されているのかもしれない。また、負債額が想像できないほど巨額なのは、百デナリオンという小額な負債(28節)と対比するための文学的な手法でもあるだろう。百デナリオンは一ワタラントンの六十万分の一にあたる。

⑦ 「自分も妻も子どもも、また持ち物も全部」売って返済することが命じられている。妻を売却することはユダヤでは禁止されていたが、子どもたちは家長に残された最後の財産であった。しかし、奴隷の値段はおおよそ五百から一千デナリオンであるので、家族を売り払っても負債額にはほど遠いことになる。そこで奴隷は「伏して、ひざまずいた」。ひざまずくのは懇願のしるしである。29節では仲間が同じように「伏して、訴えていた」と述べられている。

⑧ 奴隷は伏して懇願する。この奴隷に対して主人は深く憐れむ。27節の「深く憐れんで」はスプラシクニゾマイである。この語は共観福音書だけに12回使われる。たとえ話に使われる三例を除けば、主語はいつもイエスである。

⑨ 27節では「貸金を赦した」と述べられている。主人は「奴隷が借りた金」ではなく、「自分が貸した金」を赦す。「赦す」という動詞には「放っておく・手放す」という意味もある。主人は貸した金を放り出しても、その奴隷との関わりを良いこととして選ぶ。直訳の「貸金を赦した」を新共同訳は「その借金を帳消しにしてやった」と訳す。新共同訳が「彼を赦し」と訳している語はアポリューオー(放免する・解放する)である。

#### ④ 奴隷仲間 (28―30節)

⑩ 28節で「奴隷仲間」と訳したのは、シュンドゥーロスである。この語はシュン(一緒に)とドゥーロス(奴隷)の合成語である。文字通りには「奴隷仲間」を表すが(マタ二四49)、ドゥーロスには「大臣・宮廷官吏」の意味もあるので、ここでも王の高官を表すかもしれない。七十人訳ではこの語は高官仲間を指して使われている。なお、コロサイの信徒への手紙ではキリスト者仲間がこの語で表されている(コロ一7、四7)。レビ記25章42節には、「エジプトの国からわたしが導き出した者は皆、わたしの奴隷である」と述べられている。旧約では出エジプトによって、すべての人が等しく神の奴隷とされたが、新約の民もまた、イエスの十字架によって、神の前に等しく奴隷とされ、兄弟とされている。

⑪ 巨額の負債を赦された奴隷は、主人のもとに留まることができる。しかし彼は、主人が彼との関わりを断ち切らなかつたことを喜びとして受け取っていない。自分と同じように「こらえてください」と願う奴隷仲間を彼は牢へ入れる。この奴隷にとって大切なことは、主人や奴隷仲間との交わりではなく、借金を取り戻すことである。

#### ⑤ 心から赦さないなら (31―35節)

⑫ 32節では、27節の「貸金」を「借金」と言い換えている。つまり、主人の側から見た「貸した金」ではなく、悪い奴隷の側からの言い方に変えられたのである。このことによって奴隷の罪深

さが暴露されている。

③33節に2回用いられている「憐れむ」は、27節で「深く憐れんで」と直訳した語とは別の動詞(エレエオー)である。この動詞は共観福音書では、ほとんど「憐れんでください」の形で使われ、イエスに憐れみを乞う叫びを表す。

④34節「拷問役たち」。このたとえに登場する「奴隷」が高官を指す可能性があるが、ここでもそれが伺われる。というのは、オリエントでの拷問は通常不忠実な地方総督とか、税の引き渡しを怠った地方総督に対して行われたからである。拷問の目的は、彼らが隠した金を捜し出すことであり、その代償を彼らの親戚や友人たちからおどし取るためである。

⑤35節の「各々 その兄弟を」は、ヘブライ語では「互いに」を意味する。天の国に属する者とは、兄弟として互いに赦し合う者である。

#### ⑥神に赦された者として一緒に生きる

①赦しの回数を問うペトロにとって、「赦し」は自分の受けた損害を我慢することである。我慢は限度があるから、そのような赦しには限りがある。しかし、イエスはまったく別の「無限の赦し」を教える。

②ペトロは罪を犯した兄弟を「七回」も赦せばよいだろうと考えている。「赦し」を、受けた損害を我慢することと捉えるなら、いつかは我慢できなくなり、罪を犯した兄弟を失う。この段落の直前には、罪を犯した兄弟への忠告が述べられている。忠告するのは、「兄弟を得る」ためである(一八15―20)。イエスは「赦し」を「我慢」とは見えていない。イエスの教えるように、兄弟を「赦す」ことは兄弟を「得る」ことにつながる。

③イエスは天の国を貸借の清算をする王にたとえる。このたとえには、「借金」と「返済する」という語が繰り返し現れる。借金は返済しなければならぬ。しかし、ここに登場するのは、一万タラント(六千万日分の労賃)という巨額の負債者である。25節の「すべてを売り払え」という主人の命令は酷いように思えるが、この負債額はすべてを売っても返済できる額ではない。それでも、「こらえてください」と願う負債者を、主人は「深く憐れんで」赦す。

④主人は「こらえた」のではない。「深い憐れみ」が「赦し」となって現れる。主人は自分の貸した金を取り戻すことよりも、この奴隷との関わりが大切だと考えている。「赦し」とは、今にも断ち切れようとしている関係の回復である。本当の損害とは物質的被害ではなく、兄弟の交わりが損なわれることである。兄弟との交わりは、その窮状に同情する深い憐れみによって保たれる。⑤負債を抱える奴隷への赦しは、「貸金を赦す(貸した金を放棄する)」という主人の犠牲によって与えられた。この主人の憐れみに感謝しない者は「悪い奴隷」である。奴隷との関係を失うことを望まない主人の思いを受け取っていないからである。人は皆、自分では負いきれない罪を、神の憐れみによって赦されている。神の憐れみを知るなら、誰もが神の前に「奴隷仲間」として生きることになる。「心から赦す」者とは、「深く憐れんで赦す」神に出会った者である。

⑥「無限の赦し」を教えるたとえば、「無限の刑罰」で終わっている。神の深い憐れみと犠牲によって、神との交わりに入れられていることを蔑ろにし、神との絆を自ら断ち切る者には、神の怒りが襲いかかる。しかし、神の深い憐れみによって赦された者として生きるなら、兄弟を、神に従う仲間を失うことの痛みを感じて、「心から赦す」者となることができるはずである。